


No.	2	
学区	該当学区なし	
主な相手先	歴まち大津の未来を考える会	
日時	2019年3月22日（水曜）	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歴史文化基本構想がベースにあって、歴史的風致維持向上計画があるという構造なので、どのように整合を取るのか気になる</li> <li>・ 歴史的風致はたくさんあるが、計画に掲載して取り組む事業の効果が見えるように、実効性のある計画にしていきたい</li> <li>・ 近江八景、仏教の聖地などいろんなアプローチから歴史的風致が設定できるのではないか</li> <li>・ 最初からエリアで決めるのではなく、宗教、文学、芸術、水運、街道、「祈り」のような動詞的表現といった概念的な考えで歴史的な価値を拾い、それらが重なる部分を重点区域とするというのが本来の決め方ではないか</li> <li>・ 最初は地名を出すのではなくて、もう少し抽象的な分類で歴史的風致を設定して、重点区域を検討するほうが、説得力があるのではないか。宗教、街道、琵琶湖などいろんな概念がある</li> <li>・ 大津の歴史的風致として大きな括りを考えるのであれば、山、里、湖、街道。それらがどれだけ各地域に重きがあるか、4つとも入っている地域がどれくらいあるかというようなところで地名が入ってくると思う</li> <li>・ 今の案についてだが、「琵琶湖『に』見る歴史的風致」より「琵琶湖『で』見る歴史的風致」のほうが良いと思う。「in」ではなく、「by」のほうが良いと思う。琵琶湖の湖上で完結するのではなく、琵琶湖疏水、三井寺、石山寺が絡んでくる。「近江八景に見る歴史的風致」にしても、「近江八景で見る歴史的風致」としたほうが、景観だけでなく、自然の美しいものを愛でるという大津市民の気質が表現できるのではないか。結果を出すための言葉にするよりも、少し広く捉えられる様な、括れるような表現からしていったほうが良いのではないか</li> <li>・ 自然環境のようなものの価値は、歴史文化基本構想の中に入ってくると思うが、歴史的風致維持向上計画では入れることはできないか</li> <li>・ 三井寺のようなお寺だとお寺のバックにある山もバッファゾーンとして管理されているので、そのようなものはどのような取り扱いになるのか</li> <li>・ 市街地の部分、文化財本体がある部分、自然環境などその間のバッファゾーンにあたる部分、それぞれで活用の仕方が違ってくると思う。重点区域のエリアを設定する中で、はっきりしていきたい</li> <li>・ 計画で最も重要なのは、このエリア、部分はどのように活用するのかというやり方をしっかりと計画していきたい</li> </ul>	

- ・重点区域をいくつかに分けるのであれば、それぞれで維持向上させるにはどうしたらよいかという議論があると良いと思う
  - ・重点区域を設定するにあっては、どういうプロセス、思考で決めたのかということがわかるようにしておくとう理解しやすい
- 
- ・近江八景などのかつて描かれたものが、今でもその姿を見ることができるのかというのが大事
  - ・琵琶湖を活かすということがいずれ進んでいくのであれば、琵琶湖から見る景観の保全ということも近江八景とあわせて取り組んではどうか
  - ・文学の歌人などが来たということも大事な視点であり、その視点をも入れてはどうか
- 
- ・文化財保護法でも活用を進めていくことになっているが、文化財の所有者の立場としては、まずは文化財の保存が第一であって、歴史的風致維持向上計画の中で保存をどのように位置づけるのか
  - ・文化財の「保存」と「活用」という相反することをしようとしている。これまでも「活用」ということで、宗教行事や博物館の展示などはしてきたが、現在検討されている「活用」はこれまでとはレベルが違う。文化財の所有者としては、『『活用』して傷んできたから修繕しましょう』では困る。「活用」とは、一体何かということをしっかり記載していただきたい
  - ・計画の中で一番大切なのは、文化財の保存または活用に関する事項が一番のポイントになると思う。歴史文化基本構想で検討されたストーリーをこういう計画で活用していくというのが原則論かと思う
  - ・身障者用のトイレを作ろうにも現状変更の手続が必要で、補助の対象にならないので、所有者が自前で作らないといけなくなる。それでは活用は進まない。あと、耐震。保存修理の際には必ず耐震の調査がいる。耐震の調査をするとすると事業期間も延びるし、事業費用も増えるので、所有者に大きな負担になる。「活用」するとなると耐震が必要になると思う。
  - ・所有者の維持管理の負担は非常に大きい。観光客が来るとかで所有者にお金落ちるような「活用」計画を、門前町や周囲の町をうまく活用していく必要がある。町として人を呼べるようなことをしていくのがよい
  - ・門前と大津のまちの連続性を考えて欲しい。せめて門前の通りを修景してもらうなど、門前のイメージを維持できるような取り組みをして欲しい
  - ・三井寺の門前は大門通りより長等神社の前、長等商店街のほうになる
  - ・大津に住んでいる人が地域にある歴史を知らないなので、それをわかりやすく伝える必要がある。テーマを明確にして整理することが、事業を検討する上でも重要になってくるのではないか
  - ・大津にはいろんな歴史があるということを地元の人が気づいていない
  - ・郊外都市になってしまっている現状で、歴史を訴えて、どれだけ住民の人たちが意識してくれるかがポイント。住民が歴史の価値を実感して、誇りを持ってもらうための仕掛けが大津のような町には絶対に必要になってくる。歴まちの大津の未来を考える会はそのような目標で活動してきた

- ・サラリーマンの家庭のお母さんが子どもを連れて行事に参加して楽しんでくれた。そういった人たちは歴史に興味がないと考えてしまっていたが、そうでもないのではないかと感じた
- ・歴まちでうまくいっているところというのは、かねてより観光都市で、「『重点』と言ったらここだという」のがわかるのだが、大津はわからない。重点を決めるストーリーを可視化することが必要
- ・金沢は「加賀百万石」という全国でわかる言葉があり、そこを軸の一つ大きなところに人を集めるという仕掛けがなされている。彦根、姫路でできるパターン。高岡、萩のように長い年月をかけて作り上げているパターンもあるので、そういうところを参考にしてはどうか
- ・「加賀百万石」のような言葉が大津にも欲しい
- ・大津は「日本の仏教の聖地」みたいな場所、仏教が一つ鍵になるのではないかな。延暦寺が京都にあるというイメージがもたれているのが何とかならないか
- ・「加賀百万石」のように昔から言われているものではなく、いろんなものがある。でも、その中心に「仏教の聖地」というものがあるって、いろんなものがあるならば、そのゴチャゴチャ感を逆手にとって、「大津曼荼羅」みたいな言葉があるって、曼荼羅図を作り、曼荼羅の中にそういったものがあるって、真ん中に琵琶湖があるようなものを作ってしまうというのは面白いのではないかな。曼荼羅の中に基本となるものがあると、そのまわりにいろんなものがあることを表現できる
- ・大津のように多様な要素があるまちで、歴史的風致維持向上計画として「コンセプトは曼荼羅」と言ってもいいのではないかな。どれかを選んで活用計画を策定するのではなく、全部が合わさるような形で活用計画を策定するというのはどうか
- ・「大津すごろく」のようなものも面白いのではないかな
- ・「信仰」ということに踏み込んだものに作ると大津らしさが出るのではないかな。「宗教」は触れてはいけないものという意識が何となくあるが、そこに触れてはいけないものとしてしまうから、大津らしさが出ないのではないかなという気がする
- ・日本遺産のタイトルが「水と祈り」になっているのに学んではどうかな